

## はじめに

この本を読むにあたり、時間の無駄にならないよう大前提を伝えたい。私は障害者に興味があるわけではないし、特別な存在だとも思っていない。もし、この表現で気を悪くされた方がおられたなら、なぜ私がそう感じているのかを読み進めてほしい。決して上から目線で物事を言いたいわけではなく、《障害者》《福祉》というワードから連想されるものは、可哀想・才能・寄り添い・優しさ・低賃金・弱者、こんなところかと思うが、私の認識ではまるで違う。障害者でもいい奴もいれば悪い奴もいる、才能がある人もいれば平凡な人もいる、寄り添う必要がある障害もあれば自立できる障害もある、この業界にいる人が全員優しい心を持っているわけではなく、職がなかったからたまたま行き着いてばんやり日常を過ごしている従事者もいる、低賃金で働いている従事者もいれば高給取りの従事者もいる、しっかりと稼いでいる障害者も存在する。

ありがたいことに、この本を手を取っていただいた方々は何かしらの縁があり、また福祉に

関心がおありの方々のはずだ。ではどのポジションで障害者と接しているのだろうか？

親・兄妹・親戚・重度の方向け支援・軽度の方向け支援・教員・行政官……それらに加えて、身体障害者なのか・知的障害者なのか・精神障害者なのか・発達障害者なのか・ひきこもりなのか・一時的な症状持ちなのか。関係性と対象者により、同じ障害分野の話をしても大きく異なる価値観と知見を持っているため、話のすれ違いが起こりやすい。そして、それぞれの特性に対する関わりは経験に依存しやすいため、それぞれのコミュニティは多く存在するが同じ障害福祉業界でも交わりにくい構造になっている。だからこそ自分はこの領域の話をするのか、どのポジションで関わりを経ているからなのかを提示してから話さなければ、いつまで経っても話は進まない。いや、むしろ同じ「障害者」というワードで話すことで会話は大いに盛り上がるが建設的ではない。そして、このようなセンシティブな業界では、背景や歴史が深すぎて間違っていないも否定しづらい空気感があるため、話は揉まれず、内容を聞き合うだけになりがちで展開しない。

私は31年間、重度知的障害者の家族として生き、この6年間は障害者スタッフと共に売り上げにコミットしてきた。その中で経験したことから導いた答え、私のスタンスを提示するならば

「生きづらさを抱えていて、仕事を通じて人生を豊かにしたい！ という前向きで素直に、本気で想っている方」が支援対象だ。その中にどんな障害があっても構わない。どうだろうか。このスタンスを知らない者同士が話をすると、座談会にならないだろうか。私にはその時間はさほど必要がない。意見交換会であればいい。それもこれも、自分のポジションを提示した上での答えだから、誰からも否定される筋合いもなければ、私から強要もしてはいけない。

つまり私が言いたいのは、この本はあくまでこのスタンスの者が書いた本であるから、意見には偏りがあるということである。

せつかくの機会だから、その偏りが削り出す社会の一部を覗いてみて、何か一つでも価値観が増えていただければ、非常に嬉しく思う。

最後に、「です。ます。調」で書きませんで、文章の当たりが強くなりがちで申し訳ございません。ご容赦くださいませ（笑）。

この本に出会っていただけたことだけで、感謝いっばいです。ありがとうございます。